

東日本大震災における 警察の災害警備活動状況



埼玉県警察

1 東日本大震災の発生



平成23年3月11日午後2時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源とする大規模地震が発生。地震の規模は、日本観測史上最大のマグニチュード9.0。宮城県栗原市で震度7を記録したのをはじめ、仙台市、茨城県日立市などで震度6強を記録するなど、東日本全域を大きな揺れが襲った。

震源域は、岩手県から茨城県までの南北約500km、東西約200km（10万平方km）の広範囲に及んだ。この地震により、場所によって、最大遡上高40mを超える大津波が発生し、内陸の奥深くまで押し寄せた濁流は、破壊の限りを尽くし、平穏な営みのすべてを飲み込んだ。これまでの死者数は、約1万6,000人、行方不明者数約2,700人（平成25年3月11日現在）。未曾有の大惨事となった。

2 被害状況(全国)

（平成25年3月11日現在）

死者	約16,000人
行方不明者	約2,700人
建物被害	約120万戸
道路損壊	約4,200か所
橋梁被害	約120か所

被災地

平成23年3月11日午後2時46分、その時……



岩手県



宮城県



福島県

埼玉県内

建物被害約2,000戸
道路被害約160か所



加須市



加須市



幸手市



蕨市

3 県警察の災害警備活動状況

県内活動

県警察では、地震発生後、直ちに警察本部長を長とする埼玉県警察震災警備本部を設置して、県内の被害状況を把握するため、県の災害対策本部と連携しながら情報を集約するとともに、救出救助、避難誘導等の初動対応に当たりました。



▲緊急交通路の確保(東北自動車道浦和料金所)



▲帰宅困難者の避難誘導(浦和駅)



▲計画停電に伴う交通整理



▲ガソリン渋滞への対応



▲110番対応(警察本部)



▲犯罪抑止対策

県外活動

県警察では、東北被災三県に対して発災当日から平成25年2月20日までに延べ約5万2,500人の広域緊急援助隊等の部隊を派遣し、行方不明者の搜索、ご遺体の検視、被災地のパトロール、初動捜査活動、交通整理等の幅広い分野で支援活動を実施しました。



▲手作業での搜索



▲瓦礫をかき分けての搜索



▲ご遺体の搬送



▲ご遺体の検視場所



▲ご遺体を家族へ帰すための
DNA型検査資料の採取



▲避難所での相談及び
防犯指導活動



▲避難所での心のケア



▲インターチェンジでの流入規制



▲県警ヘリによる上空からの
搜索活動への準備



▲音楽隊による避難者に対する演奏会

災害への備え



▲建物崩壊を想定しての外壁破碎訓練



▲県警ヘリコプターからの降下訓練



▲多数遺体の検視訓練



▲負傷者の救護訓練

きずな



県外への派遣状況

平成25年3月11日現在

- ◆ 延べ 約5万2,500人
- ＜内訳＞
- ・ 岩手県 約2万 100人
- ・ 宮城県 約1万5,000人
- ・ 福島県 約1万7,400人

4 職員の体験記

「救出救助部隊員として活動して」

警備部機動隊（男性）

発災時、自宅で妻と息子と休日を過ごしていた我が家も、大きな揺れに見舞われ、食器は棚から飛び出し床に散乱し、ひどい有様となったが「とにかく行かなければ。」としか思い浮かばず、直ぐに機動隊に向け車を走らせていた。

これには妻の協力が大きく、泣く息子をなだめ、自宅をテキパキと片付けながら「家はどうにかする。早く行って。」という言葉に心配なく出動できることがありがたかった。出勤途中、ラジオから流れる震災情報も曖昧な物で詳細は判明せず、すれ違う緊急車両が県内での被害を想像させ、緊張の高まる中で機動隊に到着した。

岩手県陸前高田市に出動したが、全域が壊滅的な被害を受けており、信じられない光景が目の前に広がっていた。地面には津波で流された思い出の写真が散乱し、その全てが表を向いているように見え、我々に「早く見つけてくれ。」と訴えているかのようで、正直、胸が苦しくなった。大量の瓦礫の中を搜索するほど御遺体が続々と発見され、本来の目的である生存者の救出には至らず、無力感と徒労感が日を追うごとに増して行った。

そんな時、遺族が見守る中で活動した現場で、涙ながらに謝辞を頂いたとき「生死に関わり無く大切な存在を家族の元に還す」ということも救助に値する行為であることに改めて気付き、以降「たとえ、万分の一だとしても、一人でも多くの大切な存在を、帰りを待つ家族の元につれて帰る。」と強く決意し搜索活動を続けた。

今回の震災出動を通じ、現場で使用できた高性能資機材は僅かであった。必要なことは、部隊判断による積極的な活動と隊員間の協力、基本に根ざした応用と閃きによる現場調達品による活動で「救助とは『なんとか助けたい。』という心でするものだ。」ということ強く感じた。

「広域緊急援助隊刑事部隊遺族支援班に従事して」

警務部警務課（男性）

広域緊急援助隊刑事部隊遺族支援（以下、遺族支援班）の第1次部隊は、発災直後の3月12日未明に岩手県へ向かい、その後も班員を替えながら同県内で懸命に支援を行いました。私は3月14日から3月20日まで、3月29日から4月4日まで、及び4月16日から4月25日まで3回にわたり遺族支援班に従事しました。

2回目に従事した時のことです。女兒の御遺体が運ばれてきたとき、検視班は、心を込めて御遺体をきれいにしました。当日のうちに、女兒の祖母2人が身元を確認されました。「習っていたバレエの化粧をしているみたいにきれいだねえ・・・。」と泣きながらおっしゃいました。大震災から3週間が経過していたにもかかわらず、女兒の顔は本当にきれいでした。戦場のようなこの環境においては、これこそが最大の心のケアだと思いました。同時に、本県検視班を心から誇りに思いました。

翌日、2人の祖母は女兒のために新品の洋服を持参しました。3人の遺族支援班員が、祖母と一緒に心を込めてその服を着させてあげました。タンクトップとパンツ、白のハイソックス、黒のズボン、白のパーカー、チェックのスニーカー。このようなときにそろえるのも大変だったでしょう。どうか、天国でお母さんたちと出会って安らかでいてほしい、と祈りました。女兒を乗

せたワゴン車が出発するまでの数分間、祖母のお供をさせていただきました。「遠いところから来て、良くしてくださってありがとうございました。」とおっしゃってくれましたが、私たちの方こそ、家族のきずなと命の尊さを学ばせていただきました。

「戸惑いながらの被災者支援」

生活安全部（女性）

16年前の阪神・淡路大震災。当時小学五年生の私は、高速道路や家屋が倒壊する様子を、テレビ画面を通して遠く離れた福島で見ている。避難所で活動している多くのボランティアを見た私は、「私も社会のため、人のためになることをしたい。」と思い始めていた。それから、自分の将来を考えていく中で見つけた夢が、警察官になることだった。

警察官になるという夢をかなえ、充実した日々を送っていた平成23年3月11日、東日本大震災は発生した。津波が町を襲う映像が私の心を不安にさせた。福島にいる家族からどんなに「大丈夫」と言われても、その不安は消すことはできなかった。そして、被災地のためにできることは何かと考えた。募金などをしつつ、「もっと他にできることはないか」と思っていたところに、被災者支援活動特別派遣の話がきた。生活安全部の女性警察官10人で編成され、3月31日から4月9日までの10日間の派遣であった。派遣先は私の故郷、福島。

久しぶりに帰郷した私は言葉を失った。思い出の町は津波に襲われ何もかもなくなっていた。家も、車も、電車も、線路も何もない。あるものは瓦礫の山だけであった。中学時代、仲間と汗を流した思い出の体育館は、避難所になっていた。

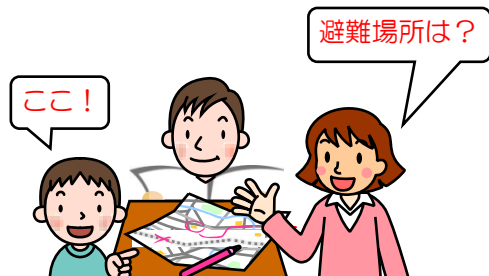
「私を育ててくれた福島のために！」という強い思いはあるのに、「果たして私は何ができるのか？」という戸惑いの毎日だった。戸惑いの中、脳梗塞の後遺症で左半身が思うように動かない女性に会った。一緒に避難してきている家族にも迷惑を掛けていることが申し訳ないと話した。私は、「焦らずゆっくり一歩ずつ歩いていけばいいですよ。」としか言えなかった。そうすると女性は、「若い人に励まされちゃって…」と言いながら涙を流した。その涙を見て、私はそれまで堪えていた涙があふれた。先が見えないという現実と、その女性の気持ちを考えると、涙を隠すことはできなかった。それと同時に、その女性にほんの少しでも元気を与えられたという、うれし涙でもあった。涙をぬぐい、手を握りながら、「ここは桜の有名な場所だから、暖かくなったらゆっくり歩いて桜を見てくださいね。」と言い笑顔で別れた。その女性と出会ってから、徐々に戸惑いは消えていった。

被災者支援活動最終日に、同世代の女性と出会った。避難所への要望を尋ねると、「毎日何もすることがないから本が読みたい。ここにあるのは子どもの本だけなんです。大人向けの本が欲しい。図書館があれば図書館に行きたい。」と言った。避難所にこの女性の要望を引き継ぎ、図書館の場所を聞いた。再び女性の所に行き、図書館への地図を渡すと、「毎日ボーっとしていたから、お巡りさんが話し相手になってくれてうれしかった。ありがとう。」と女性は言ってくれた。その時、それまでの戸惑いが全て消えた。この一言は私の救いとなった。私が福島に来た意味を感じた瞬間だった。この女性の言葉で喜んでいる私は、ただの自己満足かもしれない。しかし、それでもいい。誰かのためになったのだから。幼い頃の夢を実現させることができたのだから。

故郷の風景は変わってしまった。しかし、変わっていないものもあった。福島県民の温かさだ。だから私は、福島県民の人柄の良さを誇りに思い、これからも夢を追い続けようと思った。応援してくれる家族、そして福島のために。

一緒にがんばっぺ！ うつくしま福島！！

5 県警察からのお願い



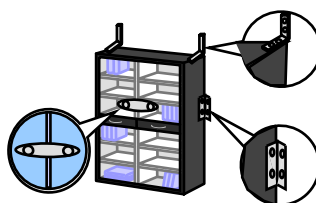
家族と共通の連絡先を決めておき、避難場所、経路を確認しておきましょう。



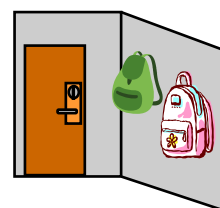
日頃から防災ハザードマップなどをよく読み危険個所を把握しておきましょう。



保存食は家族2日分、飲料水は大人1人で3ℓが目安です。



家具の転倒防止は大丈夫ですか？



非常持出品はすぐ持ち出せる場所に

食料や衣類など				あると便利なもの			
水 (1人1日3ℓ)		食べ物 (3日分)		マッチやライター		携帯ラジオ	
レトルト食品		缶詰		懐中電灯、ろうそく		予備の電池	
衣類		下着		ウエットティッシュ		筆記具	
粉ミルク		雨具		ビニール袋		ビニールシート	
ほ乳瓶		タオル		ガムテープ		卓上コンロ	
紙おむつ		毛布		寝袋		おもちゃ	
安全のために必要なもの				貴重品			
救急医療品		常備薬		印鑑		現金(小銭含む)	
軍手、マスク		靴、靴下		身分証明書類		現金通帳	

持ち出した貴重品は必ず身に付け、手放さないようにしましょう